

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

大嫌いな薬物乱用防止講演ではありませんが、それでも立場上、依頼されると、断りにくいのも事実です。それで、かつては私も、気乗りしないのを我慢して、あちこちの中学校や高校に赴き、例の「ダメ。ゼッタイ。」的な講演をしていた時期がありました。

その際、なかなか意義が見出せず、講演するモチベーションが盛り上がりがない自分を少しでも鼓舞すべく、講演先の中学校や高校の生徒を対象として、無記名の自記式アンケート調査を行うようにしていました。しかし意外にも、そのアンケート結果は、大きな衝撃とともに、薬物乱用防止教育のあり方を考えるうえでの重要なヒントを与えてくれたのです。

アンケート結果が明らかにした事実は以下のようなものでした。まず、生徒の約一割は、リストカットなどの自傷行為におよんだ経験があったということです。そして、その一割の自傷経験のある生徒は、他の生徒に比べて、自尊心尺度の得点が低く（＝自尊心が低く）、早くから飲酒や喫煙の経験がある者、また、市販の鎮痛薬や風邪薬をひそかに乱用した経験を持つ者が多いということでした。さらに、彼らのなかには、身近な知り合いに大麻や覚せい剤、シンナーといった違法薬物を使った人がいる者、あるいは、自身もそうした薬物の誘いを受けた経験のある者も多く含まれていたのです。こうした結果は、この自傷経験のある一割の生徒たちこそが、将来、薬物乱用のハイリスク群であることを示唆していました。

しかし、そうした結果よりもさらに衝撃を受けた結果がありました。そのアンケート調査の末尾には、私が行った、「ダメ。ゼッタイ。」的な薬物乱用防止講演に関する感想を書いたための自由記載欄がありました。その結果を見て、私は愕然としたのです。

というのも、大半の生徒たちが、私の講演について「薬物は怖いと思った」「絶対に手を出さないと決心した」「薬物を使う奴はばかだ」など、ほぼこちらの期待通りの模範的な感想を書いていたのに対し、自傷経験のある一割の生徒たちの感想はというと、そろいもそろって、「自分の身体を傷つけるだけで、人を傷つけているわけじゃないのだから、薬物を使いたい人は勝手に使えばいい」——これは、治療を拒む薬物依存症患者の決まり文句です——という言葉を書き連ねていたからです。

「もしかすると」と、そのとき私は考えました。「私の「ダメ。ゼッタイ。」的な講演は完全に無駄だったのではないか」と。すでに飲酒や喫煙、市販薬の乱用を通じて、「気分を変える薬物」に対する心のハードルが下がっていて、その気になれば薬物を手できそうな危なっかしい人間関係のなかにいる生徒、そして、すでに自分の身体を傷つけている子どもたち——この子たちにこそ、私はメッセージを届けなければならなかったはずです。それなのに、そのもくろみは見事に失敗したことになります。

おそらく自傷経験のない九割の子どもたちは、少なくともこの安全な日本という国のなかでは、私の講演など聞かなくとも、生涯、薬物とは縁のない生活を送るでしょう。その一方で、自分の健康を害することに抵抗感の乏しい一割の子どもたちは、私の講演を聞こうが聞くまいが、やっぱり薬物に手を出すのではないのでしょうか。このことは何を意味しているのでしょうか。そうです、「ダメ。ゼッタイ。」では効果がない、つまり「ダメ。ゼッタイ。」ではダメだということなのです。

（松本 俊彦 著 『薬物依存症』二〇一八年 より）

なお、出題にあたり一部表記を変更した箇所がある。）

## 設問

この文章は、薬物依存研究分野の最前線で活躍する医師によって記述されたものです。はじめに、著者の述べていることを二〇〇字程度で要約しなさい。次に、著者の述べていることを踏まえて、傍線部に示されるような中高生がいた場合にどのようなに関わるか、あなたの考えを六〇〇字程度で述べなさい。全体で八〇〇字以内（厳守）とします。